

事業名称	多様な来場者の気持ちを活かす博物館促進事業			
実行委員会	北のミュージアム活性化実行委員会			
中 核 館	北海道博物館			
	住所	〒004-0006 札幌市厚別区厚別町小野幌 53-2		
	TEL	011-898-0456	FAX	011-898-2657
	ホームページ	http://www.hm.pref.hokkaido.lg.jp		
構成団体	北海道開拓の村、野幌森林公園自然ふれあい交流館			
事業開始時点 の課題分析	北海道博物館は、北海道の中核的な博物館として、北海道全域の博物館等施設のネットワーク化を進め、地域の活性化に寄与することが求められている。 一方で、北海道では高齢者人口の割合が増加し（30％）、通所型・在所型の福祉施設による博物館利用ニーズが増加している。しかし、一部設備のバリアフリー対策は進められているものの、健常者をターゲットに設定された展示装置が多く、また、ソフト面でも個々の対応に終始し、福祉施設に対応する恒常的・常設的なサービス提供に至っていない。 博物館に多様な一般市民が集い、博物館が地域活性化の拠点となり得るためには、道内の博物館等施設が連携し、バリアフリーな博物館活動のあり方を模索していく必要がある。			
	事業目的	本事業では、北海道博物館が果たすべき北海道の中核的な博物館としての役割の一環として、福祉施設の利用者を含む多様な一般市民への対応をめぐる問題点や課題を集約し、道内博物館等施設の関係者間で共有すること、そして、年代や性別、障がいの有無などに限らず全ての利用者が享受できる博物館活動のあるべき姿を模索するための機会を創出することを目的とする。		
事業概要	事業①「道内博物館におけるバリアフリーな博物館活動の実践に係る現況調査」：道内博物館におけるバリアフリーな博物館活動の取組状況やそれぞれが抱える問題点や課題を集約するために、北海道博物館協会加盟 118 館園を含む 290 施設に平成 30 年 8 月 1 日付でアンケート調査を行った。 事業②「体験型イベント「北のみゆぜふえす」の開催」：10 月 28 日、北海道博物館を会場にして、関係者向け及び一般市民向けに、道内 6 地域の博物館等施設、北海道博物館、北海道開拓の村がブースを設け、各施設での実践を活かした、北海道の自然・歴史・文化に係るイベントを実施した。以上の事業を通じて、北海道の実情に則した、多様な一般市民の「知りたい」「知らせたい」「使いたい」という気持ちを活かした、バリアフリーな博物館活動のモデルケースを構築した。			
実施項目 ・ 実施体系	（1） 地域文化の発信の核となる美術館・歴史博物館 ■ア 美術館・歴史博物館の情報発信、相互連携 □イ ユニークベニューの促進 □ウ 地域のグローバル化拠点としての美術館・歴史博物館 □エ 地域に存する文化財を活用した地域共働の創造活動や地域の魅力の発掘・発信 （2） あらゆる者が参加できるプログラム及び学校教育や地域の文化施設等との連携によるアウトリーチ活動 □ア 小・中・高等学校と連携した地域文化の担い手の育成 □イ 大学等と連携した国内外で活躍する文化人材育成プログラムの開発 □ウ 社会人ほか多様な対象者のための学習講座の実施 □エ 障がい者の芸術活動支援・鑑賞活動支援等の事業 （3） 新たな機能を創造する美術館・歴史博物館 □ア 観光・まちづくり・国際交流・福祉・教育・産業等他分野との連携・融合による活動 □イ 文化財の新たな保存管理・活用の手法の開発			
施後の 成果・効果等	事業①では、290 施設の内、151 館園から回答を得た。116 の館園がスロープや多機能トイレなどのバリアフリー設備を整えている（77％）一方で、車いすをのぞく見学補助具（音声解説器、点字パネルなど）の用意は 33 館園（22％）、障がい者や社会福祉施設向けの普及プログラムの用意は 17 館園（11％）など、バリアフリーな博物館活動に踏み込み切れていない現状が浮き彫りになった。また、その背景となる課題認識として、施設の構造・設備を 90 館園（60％）、人員の少なさを 19 館園（13％）が挙げている。 事業②では、体験型イベントの参加者に対してアンケート調査を行った（参加者 349 名で回答 45 名）。ふれあい交流員として参加した博物館等施設職員からは、各施設のワークショップの内容など、イベントの成果を「自分の地域・館園の取組に活かしたい」という意見が多く、多様な年代層の一般市民からは、「博物館等施設職員との交流が楽しかった」「参加体験型のイベントで理解が深まった」などの声が多く、満足度も高かった（100％）。 道内博物館等施設の多くは、設備面や人員面での制約から、積極的にバリアフリーな博物館活動を展開し得ていない現状にある。ただ、本事業を通じて、博物館等施設職員と利用者との直接的な交流や、資料に触れる、モノを作るといった、利用者にとって能動的な博物館体験こそ、バリアフリーな博物館活動の展開にとって最も重要な要素であることを再認識することが出来た。今後、この取組をモデルケースとして、道内博物館等施設の連携を基礎に、北海道の中核的な博物館としての役割を担うべき北海道博物館としては道内博物館等施設職員同士及び一般市民との積極的な交流の場を創出していく必要があること、その上で、道内各地で博物館側と利用者側との「ふれあい」の場を広げていくことが博物館を拠点とした地域活性化への重要な一歩になることを確信した。			

【事業実績】

北海道博物館を中核館とする「北のミュージアム活性化実行委員会」として、以下の事業を実施した。

■多様な来場者の気持ちを活かす博物館促進事業

【1】道内博物館におけるバリアフリーな博物館活動の実践に係る現況調査

- ・道内博物館におけるバリアフリーな博物館活動の取組状況やそれぞれが抱える問題点や課題を集約するために、北海道博物館協会加盟 118 館園を含む 290 施設に対して平成 30 年 8 月 1 日付でアンケート調査を行い、151 館園から回答を得た。

【2】体験型イベント「北のみゆぜふえす」の開催

- ・10 月 28 日(日)、北海道博物館を会場にして、関係者向け及び一般市民向けに、道内 6 地域の博物館等施設、北海道博物館、北海道開拓の村がブースを設けて、各施設での実践を活かした、北海道の自然・歴史・文化に係るワークショップイベントを実施した。参加者は 349 名。

《主なプログラム》

- ・道央地域（地図と鉱石の山の手博物館）
：岩石や砂の観察
- ・道南地域（ピリカ旧石器文化館）
：石器レプリカづくり～ピリカ遺跡出土石器のレプリカを作る～
- ・道北地域（旭川市博物館）
：アイヌ文様コースター・アイヌ文様しおりづくり
- ・日胆地域（様似郷土館／アポイ岳ジオパークビジターセンター）
：縄文ぬり絵プラ板アクセサリづくり
- ・道東地域（釧路市立博物館／浦幌町立博物館）
：毛糸でヤチボウズのマスコットをつくる
- ・網走地域（網走市立郷土博物館）
：オホーツクの貝ストラップづくり
- ・北海道開拓の村
：入門 わら細工
- ・北海道博物館
：化石にさわろう（午前）／アイヌ民具にふれよう（午後）



縄文ぬり絵プラ板アクセサリづくり



アイヌ民具にふれよう

【成果及び今後の課題】

アンケート調査では、回答のあった 151 館園の中で、116 の館園がスロープや多機能トイレなどのバリアフリー設備を整えている（77%）一方で、車いすをのぞく見学補助具（音声解説器、点字パネルなど）の

用意は 33 館園（22%）、障がい者や社会福祉施設向けの普及プログラムの用意は 17 館園（11%）にとどまるなど、道内博物館等施設のバリアフリーな博物館活動に踏み込み切れていない現状が浮き彫りになった。また、その背景となる課題認識として、施設の構造・設備を 90 館園（60%）、人員の少なさを 19 館園（13%）が挙げている。

体験型イベントについては、ふれあい交流員として参加した博物館等施設職員からは、各施設のワークショップの内容など、イベントの成果を「自分の地域・館園の取組に活かしたい」という意見が多く、多様な年代層の一般市民からは、「博物館等施設職員との交流が楽しかった」「参加体験型のイベントで理解が深まった」などといった声が多く、満足度も高かった（100%）。

道内博物館等施設の多くは、設備面や人員面での制約から、積極的にバリアフリーな博物館活動を展開し得ていない現状にある。ただ、本事業を通じて、博物館等施設職員と利用者との直接的な交流や、資料に触れる、モノを作るといった、利用者にとって能動的な博物館体験こそ、バリアフリーな博物館活動の展開にとって最も重要な要素であることが改めて明らかになった。今後、博物館を拠点とした地域活性化に向けて、道内博物館等施設の連携を基礎に、道内各地で博物館側と利用者側との「ふれあい」の場を広げていく必要がある。